

1205 モクゲンジの野生地 42~44

塩田正行：『北部蓼科高原—東白樺湖畔採集記』
50~52

293号(1966年9月)

桧山庫三：ボタニカルノート(152) 1208 カラスノ
エンドウ 1209 ミヤマアキノノゲシ 55

竹内 茂・牧野晩成：菅平植物採集記 65~68

294号(1966年11月)

小林純子：菅平の植物 71~77

295号(1967年1月)

小林純子：菅平の植物(2) 4~7

296号(1967年3月)

小林純子：菅平の植物(3) 16~17, 25

297号(1967年5月)

小林純子：菅平の植物(4) 35~37

300号(1967年11月)

小林純子：菅平の植物(6) 91~95 107~110

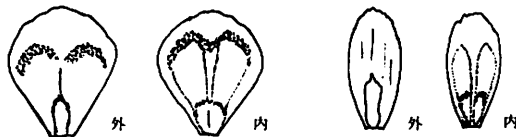
追。「野草」は1939~1942年の間は「花の木」と改称されている。以上創刊~300号までのリストであるが、号数名に統一がとれていないので、文献利用のときは、発行年月を確認の必要がある。

(横内 文人)

〔植物ニュース〕94. アカエゾマツ *Picea glehnii* (Fr. Schm.) Mast. とエゾマツ *P. jezoensis* (Sieb. et Zucc.) Carr.

最近、東北地方産のエゾマツと同定されていた一つの球果の鑑定を依頼された。トウヒ属の検索にはまず枝・葉の形質が用いられ、私自身「原色新日本高山植物図鑑(Ⅱ)」(1983)にアカエゾマツ・エゾマツ・トウヒの3者の検索表を書いたが、球果だけの場合には検索困難であることを知った。そこで、改めて球果を調べ直してみたが、次のことが分った。

アカエゾマツは、種鱗は扇形、成熟した球果では長さ13mm幅11mm程度、上縁にわずかに微鈍鋸歯があり、両面の中央より上部両側に弧状の有毛帯がある。苞鱗の先には細かい鋭鋸歯が出る。これに対して、エゾマツの種鱗は楕円形、長さ11mm、幅6mm内外、先に明らかな微鋸歯があり、両面基部付近にわずかに細毛が認められるが、アカエゾマツのような有毛帯はない。苞鱗の鋸歯は鈍く不明りょうである。トウヒはエゾマツと同一視されることもあるが(北村・村田：原色日本植物図鑑 木本編, 1979), 種鱗の幅はより大きく、上縁の切れ込みは深く、種子の翼の幅も大きいので区別は可能である。



アカエゾマツ(左)とエゾマツの種鱗と苞鱗(×4)

上記の東北地方産の標本は結局アカエゾマツと鑑定された。ところで、横内斎氏の「信濃植物誌」(1983)には、エゾマツが上高地産として記されている。果して本州に自生するのかどうか確かめ直す必要がある。所蔵標本の研究を許された林業試験場浅川実験林の各位に深謝したい。(清水建美)

95. ウワウルシ *Arctostaphylos uva-ursi* (L.) Sprengel

昨年、11月の信毎の新聞紙上などで、今井建樹氏によって八ヶ岳でウワウルシが発見されたことが報じられ、「茅野市誌」の中で、今年2月、今井氏自身もこの事実をカラー写真とともに報告されている。

ところで、私は今井氏とともにある植物専門誌にウワウルシの発見についての短報を寄せたが、これは自生品かどうか疑わしいとの理由で採用されなかった。実は、昭和30年前後に、八ヶ岳をはじめ全国各地の山岳に薬草を蒔いたという事実があり、ウワウルシもそのうちの一つであるというのがその理由である。植物が野生状態にある場合、自生か否かの判定は実にむずかしい。八ヶ岳のウワウルシが自生品かどうか確かめる宿題が実は残っているのである。果してどんな方法があるだろうか。読者の皆さんのお智慧をお借りしたいものである。(清水建美)

96. ハナノキ *Acer pycnanthum* K. Koch

周知の通り、日本のハナノキの自生地はごく限られている。これに対してアメリカハナノキ *A. rubrum* L. は北アメリカ東部の温帯地方では至るところに生育している。互いに非常によく似ていて、私にはまだ別種であるという確信がない。地史的にも距離的にも非常に離れていながら、果して近縁の度合いはどうかは大きな問題である。その類縁性の検定のために、大陸間交配をおこなってF₁ 雑性を確かめるという方法が考えられる。実は、一昨年、アメリカからとり寄せた1年枝を日本のハナノキに接木をしておいたのだが、そのうちの1本の♀の接穂が今春花を咲かせた。早速に下伊那産の花粉をかけたが少しづつ実が大きくなり始めている。完熟するかどうか見ものである。接木方式をとれば、木本性の種類であっても、意外に早く結論が得られるのではないかと思う。(清水建美)